

まえがき	1
------	---

## 第1章 総記 6

第1節 日本語と日本語学	6
第2節 言語研究とその分野	7
1 言語とは何か	7
2 研究の諸分野	9
第3節 日本語の系統	11
1 言語の系統と分類	11
2 日本語系統論	11

## 第2章 音声・音韻 12

第1節 音声と音韻	12
1 音声	12
2 母音と子音	15
第2節 音節と音節構造	19
1 音節とモーラ (拍)	19
2 日本語の音声	21
3 特殊音素	23
第3節 アクセント	25
1 日本語アクセントの性格	25
2 品詞とアクセント	28
3 複合名詞・固有名詞のアクセント	31
4 アクセントの型の対応	33
第4節 イントネーションとプロミネンス	37

## 第3章 文字・表記 40

第1節 文字とは	40
1 文字の機能	40
2 文字の分類	41
第2節 漢字	42
1 六書、書体、字体	44

2 音訓	47
3 字音	48
第3節 仮名	51
1 万葉仮名	51
2 平仮名	52
3 片仮名	53
4 五十音図といろは歌	55
第4節 ローマ字	58
第5節 現代の表記法	60
1 仮名遣い	60
2 送り仮名	62
3 常用漢字	62
4 補助符号	64

## 第4章 語彙 66

第1節 語と語彙	66
1 語とは何か	66
2 語構成	67
3 造語法	69
第2節 語種	71
1 出自による分類	71
2 和語	71
3 漢語	73
4 外来語	75
5 混種語	77
6 語種の比率	78
第3節 語彙と語彙量	79
1 語彙の系統性	79
2 理解語彙と使用語彙	80
3 語彙量とカバー率	81
第4節 語の意味	84
1 意味とは何か	84
2 意味関係	85
3 原義と転義	86
第5節 語の誕生と歴史	88
1 語源・語史	88

2	雅語と俗語.....	89
3	新語・流行語.....	89
4	命名論・隠語.....	90

## 第5章 文法..... 92

第1節	文とその構造.....	92
1	文.....	92
2	文の分類.....	93
3	文の組立て.....	94
4	品詞.....	96
第2節	用言.....	99
1	動詞.....	99
2	形容詞.....	100
第3節	活用のない自立語.....	102
1	名詞.....	102
2	指示詞.....	103
3	副詞.....	103
4	連体詞.....	105
5	接続詞.....	106
6	感動詞.....	107
第4節	付属語.....	108
1	助動詞.....	108
2	助詞.....	108
3	格助詞.....	109
4	主題を示す助詞.....	110
第5節	形態論.....	111
1	動詞文節の形態.....	111
2	形容詞文節の形態.....	114
第6節	態.....	115
1	態と格.....	115
2	受動態.....	115
3	使役態.....	116
4	可能態.....	117
第7節	アスペクト（相）.....	118
1	テイル形.....	118
2	テアル形.....	119

3	テシマウ形.....	119
第8節	モダリティ.....	120
第9節	授受表現.....	121
1	テヤル形.....	121
2	テモラウ形.....	122
3	テクレル形.....	122
第10節	さまざまな節.....	123
1	補充節.....	123
2	運用修飾節.....	123
3	連体修飾節.....	123

## 第6章 現代生活と日本語..... 124

第1節	待遇表現.....	124
1	待遇表現の分類.....	124
2	敬語の表現形式.....	127
3	注意すべき敬語.....	130
第2節	位相語.....	132
1	位相論.....	133
2	方言と共通語.....	134
第3節	文章と文体.....	137
1	文章.....	137
2	文体.....	139
第4節	言語研究の諸相.....	142
1	認知言語学.....	142
2	対照言語学.....	144
3	語用論.....	146
4	社会言語学.....	148
第5節	世界の中の日本語.....	150
1	日本語教育.....	150
2	日本語と外国語.....	151

主要参考文献.....	154
事項・人名・書名索引.....	156
執筆担当者一覧.....	167

# 文字・表記

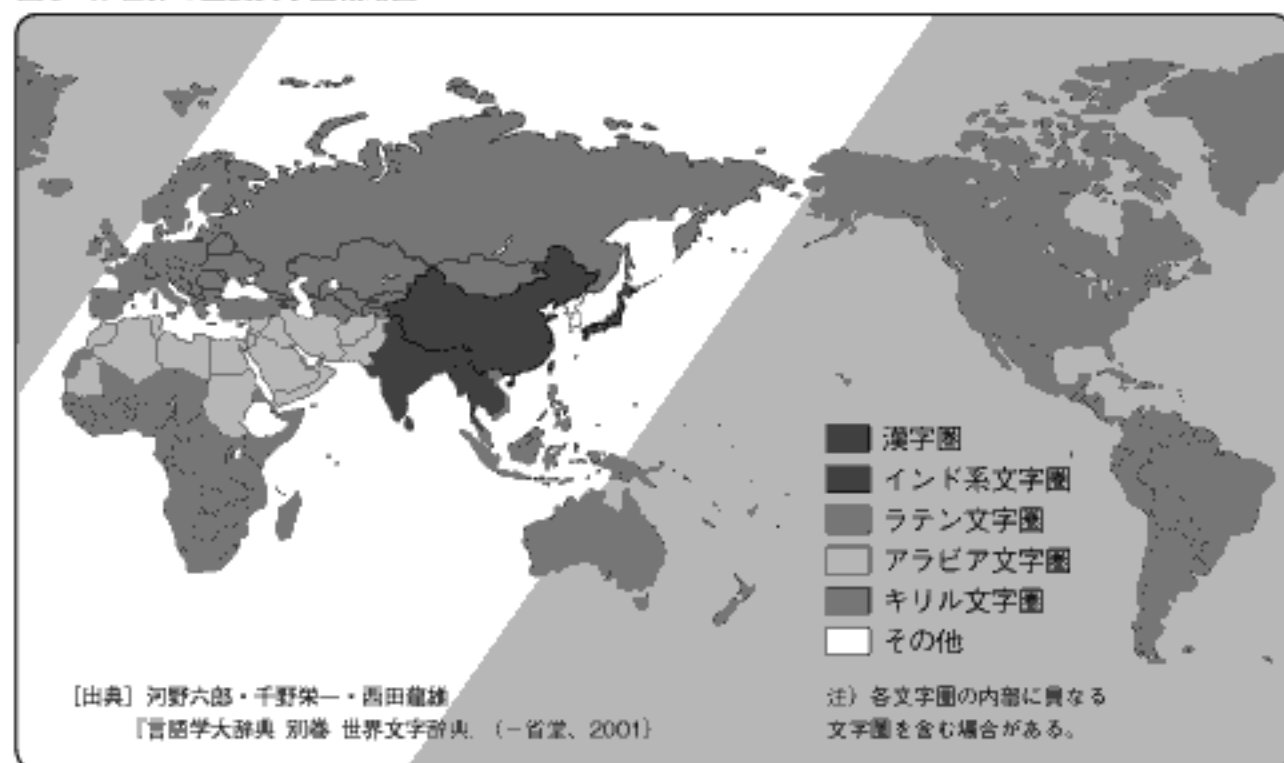
## 第1節 文字とは

### 1 文字の機能

ことばは、一般に音声言語と文字言語とに分かれる。音声言語は、口や喉といったヒトの器官から発せられる音を耳で（＝聴覚映像として）キャッチする。これに対して、文字言語は、そこに書かれた形を目で見て（＝視覚映像として）理解する。

音声言語は、話し手と聞き手との間で直接交わされるものであり、その時、その場にいない相手にも何とかして意思を伝えたいという欲求に応えるために、たとえば縄に結び目を付けたり、樹木にキズを付けて目印にするなどさまざまな工夫が重ねられた。その中で、仲間同士の約束事として、線

図3-1. 世界の主要文字圏概略図



や点の形がある意味や音と結びつき、記号のセットとして通用するようになった。これが文字である。

社会が複雑化し政治が行われ、より高度の文化を育むようになるにつれ、時間と空間を隔てた伝達手段への依存が高まり、文字が創造された。そして、多くの人々に意思を伝えたり、知識を蓄積したりするために記録することが必要となった。国家や文明の誕生と文字の発生には密接な関係があると言われるゆえんである(図3-1)。

▶文字……(平面上に記すことによって)音声言語を視覚化した記号の体系。ことばの単位を一定の約束のもとに置き換えて記録する記号。

▶文字の機能……音声によって発せら

れたことばは、その瞬間的な行為によって実現されるものなので、そのまま後世に伝えることができないし、また遠くに伝達することもできない。文字は、その話しことばの欠陥を補い、時間的にも空間的にも伝達機能を拡張した。

▶表記……「書記」とも言う。文字による書き方の様式や一々の文字の用法といった機能面を指す。

### 2 文字の分類

文字は、音声言語との対応のあり方から、意味の面でことばとかわる表意文字と、音声の面でかわる表音文字とに分類される。文字は最初、絵文字として物の形を写して作られ、これ

表3-1. 象形文字の対照表

	「水」	「山」	「足」	「鳥」	「魚」	「蛇」
シュメール文字						
エジプトの象形文字						
中国の甲骨文字						
補注	漢字の「川」の古い字形は	漢字の古形は連山、とくにそのそばえるさまをかたどっている。	シュメール文字の足の象形は「足」の意味では使われない。	頭部のみを描くのはシュメール文字の特徴。	いずれも魚の象形であるが、それぞれの特徴がよく現れている。	漢字は「它」の古形で、蛇の原字。

[出典] 河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』(三省堂、2001)

あるが、本来、「こころ」は心臓を表すのではなく、「きも」も肝臓を表す語ではなかった。これら目に見えない内臓の名詞は、ほとんどが「心臓」「肝臓」「腎臓」などのように漢語で表されている。

また、和語は基本的な動詞や形容詞に多く見られる。「見る、する、食べる、思う、考える」や、「赤い、白い、早い、悲しい、嬉しい」などである。しかし、日本語全体から見ると動詞に和語は少

ない。その分、動作を修飾・限定する擬音語や擬態語による表現が発達しているのである。それは、ほとんどが和語の動詞・形容詞の語根に由来している。

あさ→あっさり、うす→うっすら  
すか→すっかり、しみ→しんみり  
やわ→やんわり、すな→すんなり  
和語の形態的特徴に対して、漢語は対照的で、「漠然、芸術、来客、廊下」などのように、語頭に濁音も来れば、

r行音も来る。そして、長音や拗音、促音、撥音などは「公平、華奢、実行、汨濫」のように漢語の特徴的な発音と言える。

### 3 漢語

古く中国から入ってきた語を漢語と言うが、これには日本で作られたものも含まれている。そのため、中国の発音(漢字音)にしたがって読むという特徴から「字音語」とも呼ばれる。

現代日本語における漢語は、図4-3のように人間活動や抽象的關係を表すものに多く用いられている。特に政府機関の活動および官位・職階などに多い。

### ●漢語と字音

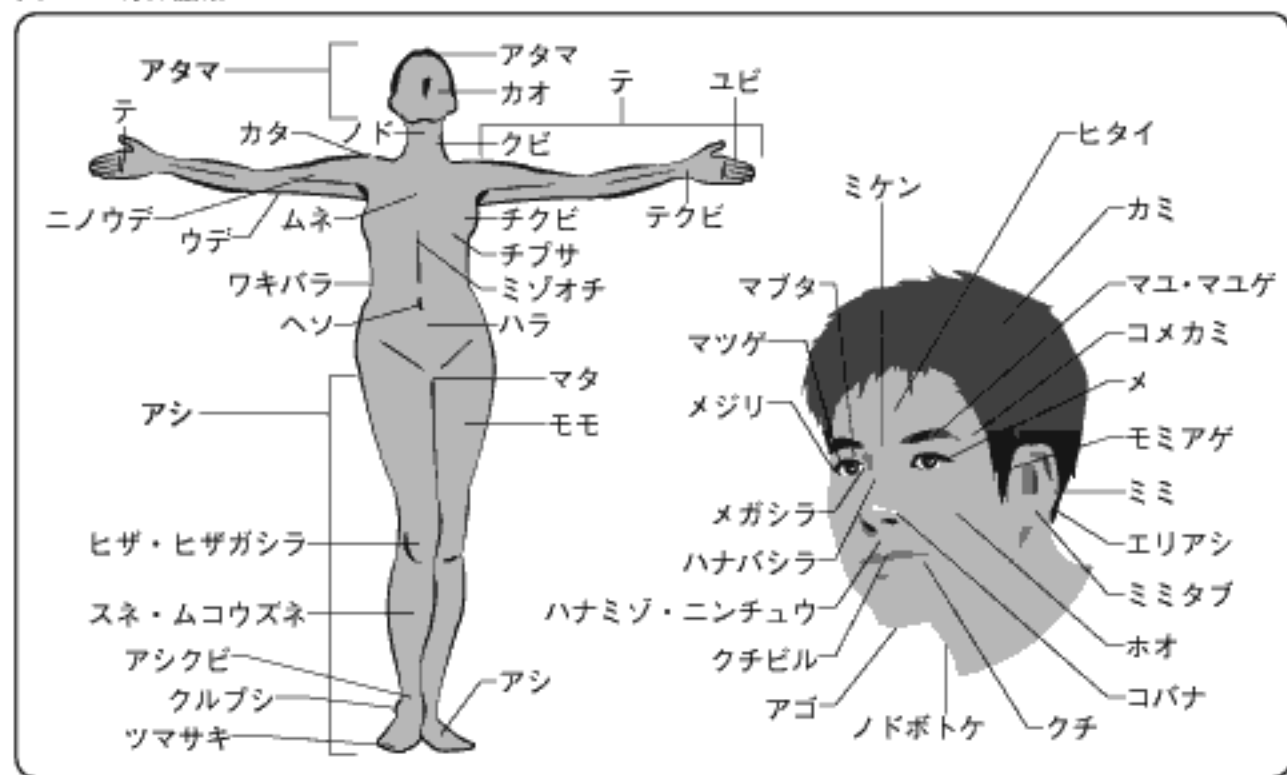
漢語を字音の種類によって分類すると、次のようになる。

呉音による漢語：力士、<sup>りき</sup>経文、<sup>きょうもん</sup>京都  
漢音による漢語：<sup>りよく</sup>能力、<sup>けいぎ</sup>経済、<sup>きん</sup>京阪  
唐音による漢語：<sup>かん</sup>行脚、<sup>しん</sup>普請、<sup>す</sup>椅子

呉音による漢語には「法師、力士、布施」など仏教關係の語彙が多いのが特徴であり、また「無理、白米、家来」のように庶民の生活語彙にも多く見られる。漢音による漢語は遣隋使・遣唐使たちの帰国とともに伝わってきたもので、漢文を読む際の正音とされた。漢字音の中で最もよく使われている読みである。

唐音(宋音とも言う)による語は中世・近世にわたって、禅宗關係の僧侶

図4-2. 身体語彙



### ■オノマトペ

「音象徴語」「擬音語」「擬態語」などとも言う。構造的には重なり語が多く、また、撥音(ん)や促音(っ)を挟んで「り」で終わるものも多い。金田一春彦はさらに擬態語の中の感情を表すこ

とばを擬情語というカテゴリーに分けている。日本語の擬態語は状態や心境を表現する副詞のような役割を負っているのに対して、英語やフランス語など欧米諸国のことばは動詞の細分化

によって表現を使い分ける。逆に、朝鮮語をはじめとした東アジア、インドネシアなど東南アジア、そしてアフリカの言語では、日本と似た音象徴語の使い方をしてる。

### ■呉音・漢音両読語

呉音と漢音の両様の読みを持つ漢語があり、意味的に異なるものもある。  
競売(きょうばい・ケイバイ)  
兵法(へいほう・ヒョウホウ)  
悪霊(あくりょう・アクレイ)  
光明(こうみょう・コウメイ)  
人間(にんげん・ジンカン)  
食堂(じきどう・ショクドウ)  
工夫(くふう・コウフ)  
仏語(ぶつご・フツゴ)  
末期(まつご・マツキ)  
定数(じょうすう・テイスイ)

図4-3. 意味分野と語種

	和語	漢語	外来語	混種語
抽象的關係	34.0 (%)	62.8	2.2	1.0
人間活動の主体	39.0	55.9	3.0	2.1
人間活動	18.5	77.0	2.5	2.1
生産物および用具	36.6	40.5	19.4	3.5
自然物および自然現象	65.6	30.9	2.9	0.6

【出典】林大監修『図説日本語』(角川書店、1982)をもとに作成

1 語源・語史

ことばにはそれぞれルーツがあって、それをたどってみるのも楽しい。動物の「ワニ」の語源を追求すると、なんと日本に最初に書をもたらした渡来人「王仁」の名前にたどり着く。その領域で祖になるような存在という点で共通しているからだ。その線でいくと、「高い」ことと、空高く飛ぶ「鷹」も同じルーツから来ていると考えられる。

語源を考える場合、何かの類似をもって関連付けようとする向きもある。

いわゆる民間語源説である。

語源探求は、ややもすれば恣意的な解釈に流れやすい危険が潜んでいるので、それをさける意味で、語史の研究はより客観的に進めるべきである。

日本語は、上代では単音節の語が多かった。阪倉篤義の調査によれば、上代特殊仮名遣いの崩壊とともに、同音語が増えてきて、148もあった単音節語がわずかに「江、目」などの48語しか残らず、後は「えだ、あし、ここ」のようにほとんど複音節化されていったという。こうした語の形の変化も見逃すことができない。

2 雅語と俗語

「雅語」とは、近代以前においては平安時代の奥ゆかしい表現を指す場合もあれば、漢語の格調高い書きことばを指す場合もあった。これに対して、俗語は主として近世以降の口語（話しことば）を指す。江戸時代の辞書である「雅言集覧」「俚言集覧」は、それぞれの領域をカバーするものとして知られている。

現代においては、雅語とは洗練された表現に用いる語を指すことが多く、俗語は逆に改まった場面では使用することがはばかれる語を指す。たとえば、前者には「いそしむ」「つどう」「いざなう」などが挙げられ、後者には「ド

ンパチ」「ぺこぺこ」「おけら」などがある。

3 新語・流行語

●新語

「新語」とは、新たに日本語に用いられるようになった語である。「画素、触媒、超伝導」など人工的に新たな語形として作り出されたものもあれば、「朝シャン、レタックス、フリーター」のように既存の語形を変形させて新たな意味を付与したものもある。

●流行語

図4-12のように、「流行語」とは、その時代の雰囲気や状況を反映し、広く人々に用いられたことばを指す。流行語は必

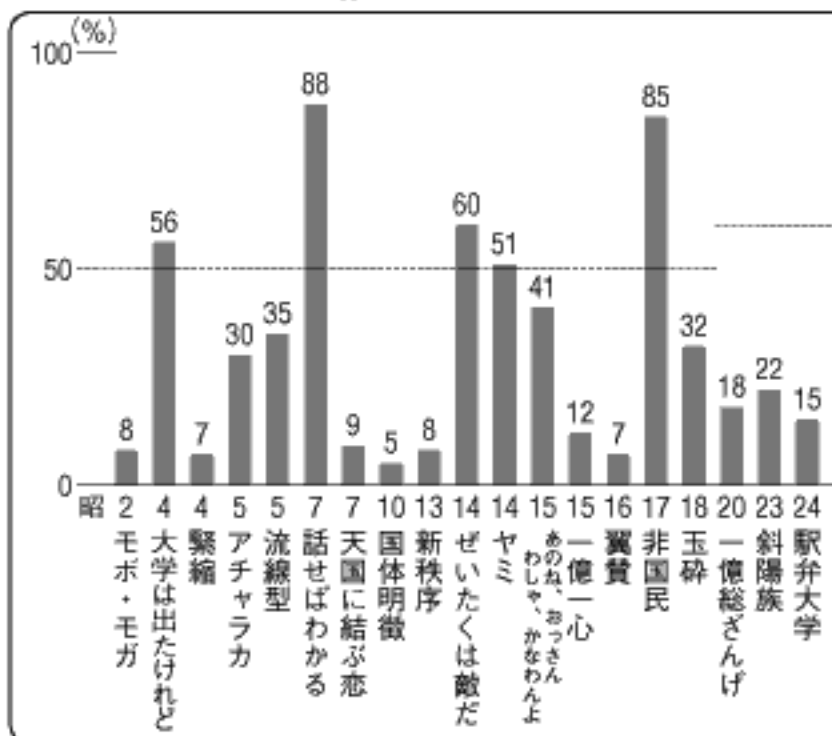
■民間語源説

語源についての俗説のことを民間語源説と言う。「師走（しはす）」は「先生が駆け回るほど忙しい月」の意であるとか、「湯葉（ゆば）」は黄色でシワがあるのを「姥（うば）」の顔に見立てたとかいう類である。

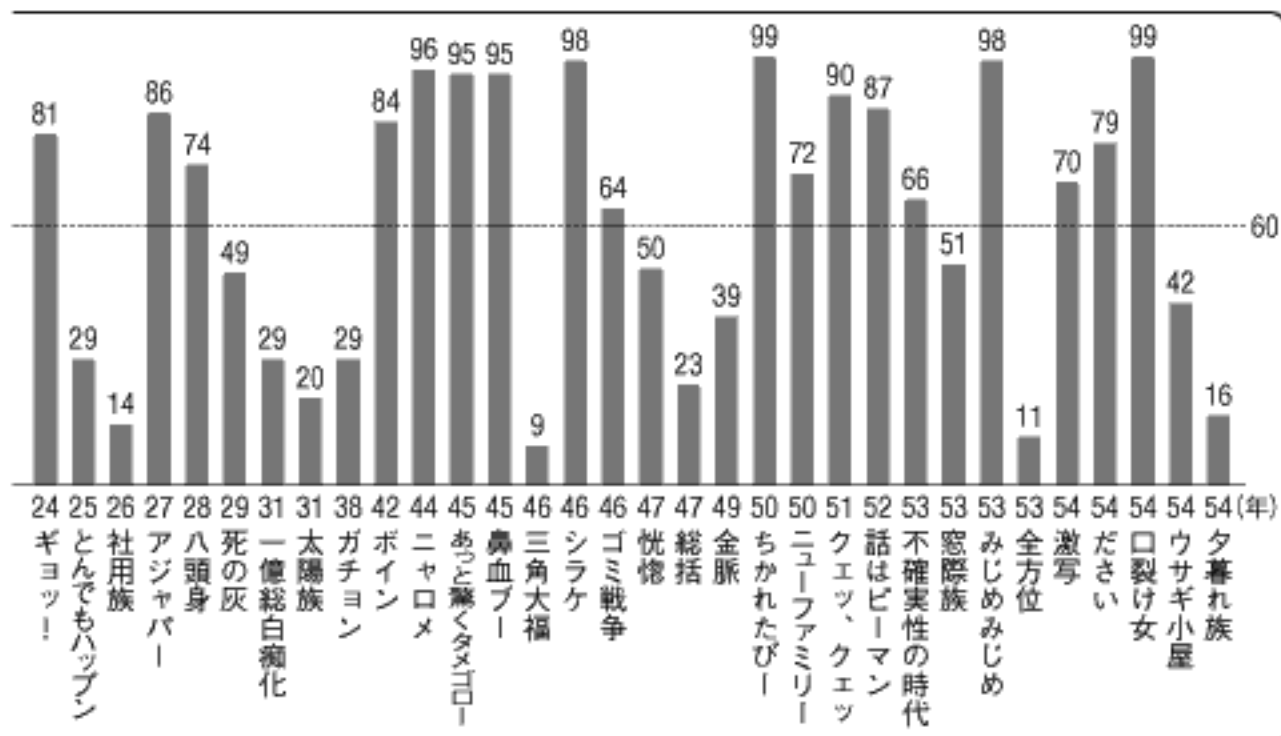
■雅語

たとえば、「誘う」の代わりに「いざなう」を用いると、優雅な感じが増すであろう。和歌などに見られる古語で、現在日常には使われないものを、特に雅語と言う。「ふみ」「やどり」「しじま」「あらがう」「つどう」「うらら」などの類で、これらには典雅なひびきを感じられる。

図4-12. 新語・流行語—高校生における知名度



【出典】林大監修『図説日本語』（角川書店、1982）をもとに作成



\* 1979年に高校生1180名を対象にした調査

# 現代生活と日本語

## 第1節 待遇表現

### 1 待遇表現の分類

話し手と聞き手、第三者とのさまざまな関係は、あらゆる言語行動自体に外在的に表されている。改まった場であれ、日常的な場であれ、相互の人間関係に基づいて、話し手の主体的な意識によってことばを使い分ける表現を「待遇表現」と言う。

待遇表現は大きく、語彙と文体に分けられる。語彙には敬語、普通語、軽卑語があり、文体には丁寧体と普通体がある(図6-1)。

#### • タテの人間関係による待遇

- (1) A 「何を召し上がりますか？」  
B 「そうだな、A 定食にしよう。」
- (2) C 「君は何にする？」

D 「そうですね、A 定食にいただきます。」

(1)(2)はともに、相手に何を食べるかを問い、A 定食だと答える場面であるが、これらの表現には話者双方の社会的地位の上下関係が反映されていることが見て取れる。(1)ではBはAより地位が高く、(2)ではCはDより地位が高いと認められる。

それは、(1)では、Aが「食べる」という語の代わりに「召し上がる」という語を用いてBに敬意を表し、(2)では、Dが「する」という語の代わりに「いたす」という語を用い、「ます」という語を添えて、Cに敬意を表していると分析できるからである。これに対して、(1)ではBはAに対して、(2)ではC

はDに対して敬意を表す表現を用いていない。

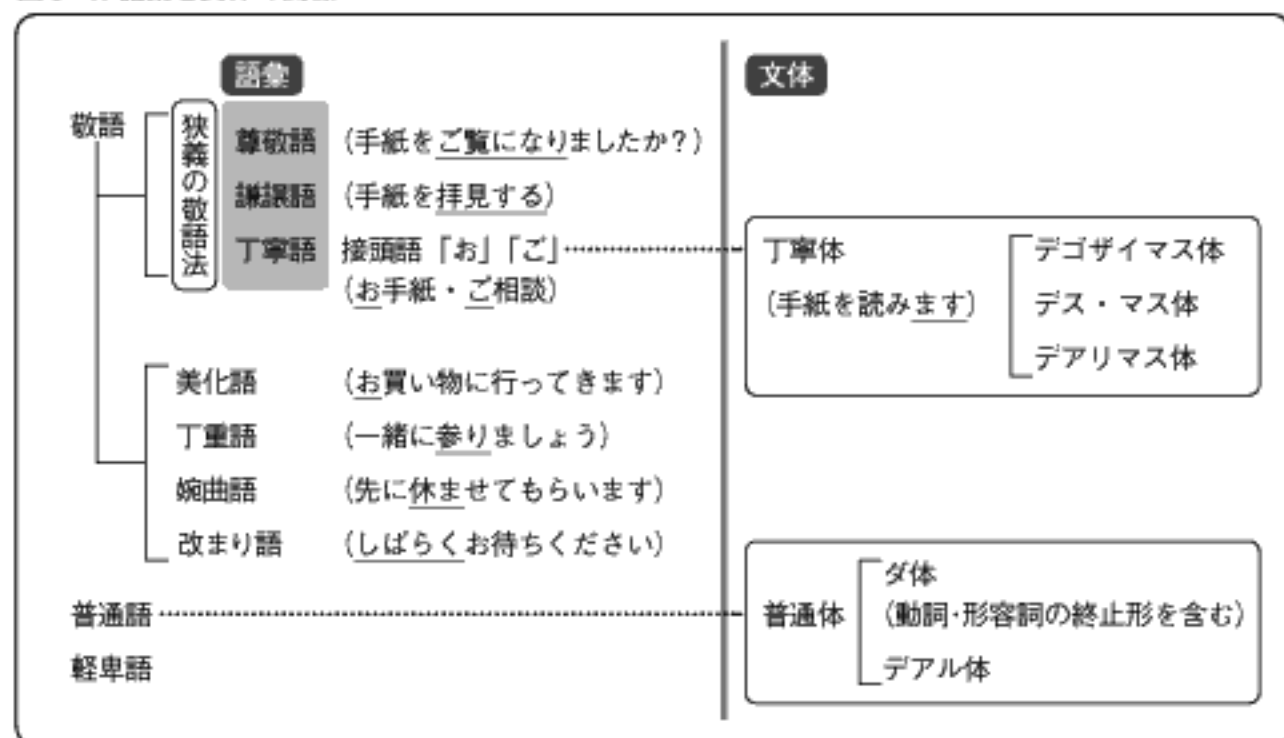
この場合、その人物が自分より地位や年齢などが上か下か、恩恵や利益を受けているか与えているかという「タテの人間関係」によって、敬意を表すか否か、ことばを選択しているのである。

#### • ヨコの人間関係による待遇

(3) 〈会社のパーティーで〉

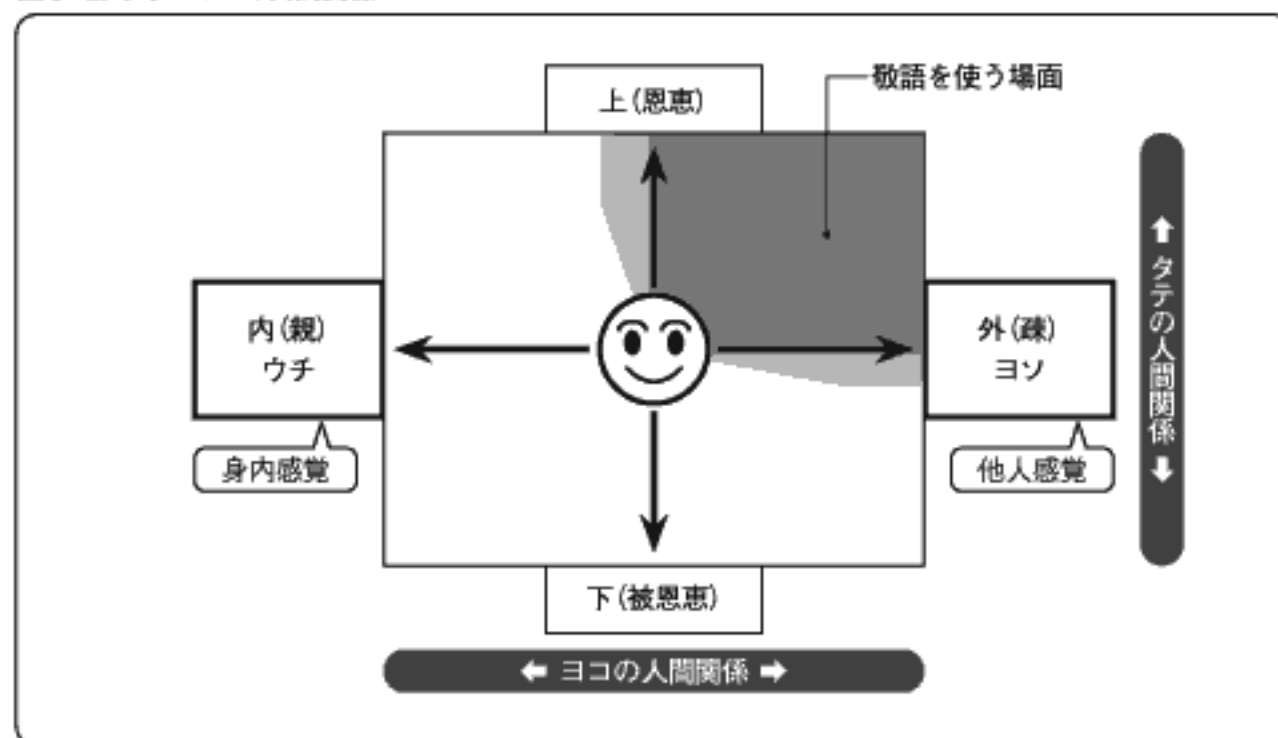
E 「まず、社長より一言ご挨拶申し上げます。」  
司会役のEがその会社の社員であるとした場合、社内での地位は社長より低いにもかかわらず、Eは社長に対して敬意を表す表現をせず、むしろ聴衆

図6-1. 語彙と文体の関係



[出典] 沖森卓也・中村幸弘「ベネッセ表現統解国語辞典」(ベネッセコーポレーション、2003) をもとに作成

図6-2. タテ・ヨコの人間関係



[出典] 沖森卓也・中村幸弘「ベネッセ表現統解国語辞典」(ベネッセコーポレーション、2003) をもとに作成